

東南アジアと日本の劇作家のための、国際プログラムが始動

SPAC×国際交流基金「BIOTOPE」

SPAC-静岡県舞台芸術センターは、国際交流基金との共催により、東南アジア諸国との舞台芸術における国際交流事業「BIOTOPE（ビオトープ）」を開催します。

本プログラムは2026年から3年間にわたって行われ、東南アジアと日本の劇作家が、交流しながら創作に取り組む「BIOTOPE—劇作家のためのキャンプ」を中心に、SHIZUOKA せかい演劇祭の期間中には、東南アジア諸国の舞台芸術作品を上演する招聘プログラムのほか、招聘アーティストによるワークショップや交流イベントなども実施します。



ロゴデザイン：MOTOMOTO inc.

異なる2つの図形で「B」を構成したシンボルマーク。

様々な背景や価値観を持った人たちが、同じ空間で関わり合い、共に創作していく姿を表しています。

「BIOTOPE—劇作家のためのキャンプ」概要

「BIOTOPE—劇作家のためのキャンプ」は、SPACの創作拠点である「舞台芸術公園」をひとつの実験場として、アジアにとって（ヨーロッパで生まれた）演劇／舞台芸術とは何か、戯曲とは何か、という問いに果敢に挑むアーティストたちと共に対話と実験を重ねるプラットフォームです。

参加する劇作家たちは3年間、静岡を拠点にしながら、フィリピン・インドネシアへ共に旅をし、各国のフェスティバルに参加します。また、参加者の関心に合わせて行く先々の街のリサーチも行います。普段はそれぞれの国を拠点に活動している多様な出自の劇作家たちが、この国際的なプラットフォームで定期的に集まり、対話を重ねながら、各々新しい作品を生み出していきます。その全ての作品が、2028年の「SHIZUOKA せかい演劇祭」にて、リーディング上演されます。

参加劇作家

アドリアーナ・ノルディン・マナン（マレーシア）、ゲラン・ヴァレラ・ルアールカ（フィリピン）、
チャトゥラチャイ・シーチャンワンペン（タイ）、ジャン・バプティスト・プー（カンボジア）、西尾佳織（日本）、
山田カイル（日本）、シヒフル・リドイ（インドネシア）

※名前アルファベット順

スタッフ

ディレクター：石神夏希（劇作家／SHIZUOKA せかい演劇祭 2026 アーティスティック・ディレクター）

プロデューサー：前原拓也（SPAC）

コラボレーター：

マルコ・ヴィアナ（ザ・ヴァージン・ラボフェスト 共同ディレクター、劇団タンハラン・フィリピン アソシエイト・アーティスティック・ディレクター）

ムハンマド・アベ（インドネシア・ドラマティック・リーディング・フェスティバル（IDRF）ディレクター）

ファシリテーター：山口恵子（俳優、シアターメイカー）

主催：国際交流基金、SPAC-静岡県舞台芸術センター

JAPAN FOUNDATION
国際交流基金

SPAC
SHIZUOKA PERFORMING ARTS CENTER



Adriana Nordin Manan アドリアーナ・ノルディン・マナン (マレーシア)

作家、翻訳者、劇作家、研究者、キュレーター、ドラマトゥルク、教育者、起業家。クアラルンプール拠点。ニューヨーク大学で政治学修士号、コルビー大学（メイン州）で学士号を取得。言語、ストーリーテリング、新作のインキュベーションを通じた文化交流に取り組む Cocoon Creative Lab (CCL) を創設し、芸術監督を務める。BOH Cameronian Arts Awards (2024 年) で助演俳優賞、最優秀オリジナル脚本賞、最優秀演出賞、2023 年ベスト作品賞など、多くの評価を受けた。創造性と社会のあらゆる層に向けたエンパワーメントの交差する領域に関心を寄せている。



Guelan Varela-Luarca グラン・ヴァレラ・ルアルカ (フィリピン)

俳優、劇作家、翻訳者、演出家。近年の主な作品には、戯曲『Dogsblood』のリーディング公演、ジャンカルロ・アブラハム監督による高い評価を受けた映画『Dagitab』の舞台化・演出、時間と喪失をテーマにした『3 Upan』の脚本・演出などがある。アテネオ・デ・マニラ大学の美術学部で教えるほか、新しい劇団 Scene Change の創設メンバーでありプログラマーでもある。ニューヨーク市立大学ハンター校で劇作（戯曲執筆）の芸術学修士号を取得し、2024 年ドン・カルロス・パランカ記念賞殿堂入りを果たした。



Jaturachai Srichanwanpen チャトウラチャイ・シーチャンワンペン (タイ)

バンコクを拠点とするタイのシアターメーカー、俳優、作家。彼の作品は、日常と静かな演劇の魔法の間を行き来し、恋人、家族、友人、見知らぬ者などの関係の中での小さな瞬間が、社会の深いリズムを映し出す様子を探求する。タイの演劇界で多くの作品を執筆・演出しており、代表作に『Monrak Transistor』(2022) がある。国際的なプロジェクトとして、シンガポールの劇作家タン・ショウチェンとの協働『Open Waters』(2016-2018) があり、2019 年には、ポルトガルとタイの外交関係 500 周年を記念し、在タイ・ポルトガル大使館の委嘱で『My Mother's Kitchen』を執筆。



Jean-Baptiste Phou ジャン・バプティスト・プー (カンボジア)

2008 年に俳優としてキャリアを開始し、その後、舞台作品の執筆・演出へと活動を広げた。代表作に『Cambodge, me voici』(L'Asiathèque, 2017) があり、2023 年には『80 mots du Cambodge』(L'Asiathèque)、続いて 2024 年に回想録『La Peau hors du placard』(Le Seuil) を出版し、それを舞台作品にも発展させた。2022 年には映画『La Langue de ma mère』を監督し、ヴズール国際アジア映画祭で観客賞（最優秀ドキュメンタリー）を受賞。2026 年にはサンフランシスコのヴィラ・アルベルティーヌ・フェローに選出されている。



西尾佳織 (日本)

1985 年東京生まれ。劇作家、演出家、烏公園主宰。幼少期をマレーシアで過ごす。社会の中で人と人のあいだに引かれる境界線を、さまざまな形で問い直す作品をつくらせている。岸田國土戯曲賞最終候補に 3 度ノミネート。フェスティバル/トーキョー、ふじのくににぎせかい演劇祭、瀬戸内国際芸術祭、アジア女性演出家展（ソウル）など、国際演劇祭への招聘多数。近年のプロジェクトに、マレーシアのダンサー・振付家の Lee Ren Xin との「からゆきさん」共同リサーチや、そこから生まれた『泳ぐ彼女は果てを見ている』など。2025 年よりセゾン文化財団フェロー II。



山田カイル (日本)

演劇作家、ドラマトゥルク、翻訳家。抗原劇場代表。1993 年テキサスに生まれ、その後青森で育つ。大学院在籍中にダンスドラマトゥルクとして活動を始め、修了後、自身の創作活動を始動。地域に残る民話や近代以前のテキストに取材し、演劇というメディアの仮設性を通して、悠久の時間感覚を描き出すパフォーマンスを制作している。自ら演出する戯曲のほかに、ブラッドベリの『華氏 451 度』に着想を得て、観客が本を暗記するプロジェクト『華氏同盟』や、熊害のリサーチプロジェクト『A CALL TO BEAR ARMS』など、「舞台芸術」の枠外での「演劇」の制作にも取り組んでいる。



Shohifur Ridho'i ショヒフル・リドイ (インドネシア)

ジョグジャカルタと東ジャワ州のマドウラを拠点に、パフォーマンス、リサーチ、キュレーションの交差点で活動する作家・演出家。rokateater の創設者兼芸術監督、芸術コレクティブ Lembâna Artgroecosystem の共同イニシエーター、インドネシアのパフォーマンス実践者が集う ガラシ・パフォーマンス・インスティテュートのネットワークコーディネーターを務める。日常の身体を「生産・分配・権力交渉」の場として見つめ、いかに小さな振る舞いが社会関係を媒介し歴史を反映するのか探求している。同時代のインドネシアのパフォーマンスにおける表象 (representation) と現前 (presentation) の関係に関心がある。



ディレクター：石神夏希

劇作家。国内外で都市やコミュニティのオルタナティブなふるまいを上演する演劇やアートプロジェクトを手がける。ディレクションの仕事として「東アジア文化都市 2019 豊島」舞台芸術部門事業ディレクター、ADAM Artist Lab 2019（台北）ゲストキュレーター、静岡市まちは劇場『きよの演劇』企画・ディレクター（2021年度）他。SPACでは『弱法師』（作：三島由紀夫）、『お艶の恋』（原作：谷崎潤一郎『お艶殺し』）を演出、「ふじのくにせかい演劇祭 2024」にて間食付きツアーパフォーマンス『かちかち山の台所』を作・演出。「SPAC 秋のシーズン 2025-2026」よりアーティストティック・ディレクターを務める。



プロデューサー：前原拓也

ドラマツルク、翻訳家、制作。2022年より、文化庁新進芸術家海外研修制度にて2年間ミュンヘンに滞在し、アウグスト・エヴァーディング演劇アカデミーのドラマツルク・科修士課程修了。2025年より、SPAC-静岡県舞台芸術センターに勤務し、SHIZUOKA せかい演劇祭のプログラミングにも携わる。またフリーランスとして、演劇やオペラのドラマツルクとして活動。これまで、小野寺修二、稲葉賀恵、佐藤美晴、額田大志などの演出作品や、向井航などの作曲作品にドラマツルクとして携わる。字幕を中心にドイツ語翻訳家としても活動する。



コラボレーター：マルコ・ヴィアナ

俳優、演出家、デザイナー。劇団タンハラン・フィリピノの俳優としてキャリアをスタートし、フィリピンで基礎演技クラス、フォーラム・シアター・ワークショップ、子ども向けのアート・ワークショップを指導するユニセフ認定の俳優ファシリテーターの一員としても活動した。一方で、劇団タンハラン・フィリピノ作品の舞台や衣装のデザインを担当し、創作活動の幅を広げている。現在は、フィリピンの若手劇作家の登竜門であるザ・ヴァージン・ラボフェストの共同ディレクター、およびフィリピンの国立劇団であるタンハラン・フィリピノのアソシエイト・アーティストティック・ディレクターを務めている。



コラボレーター：ムハンマド・アペ

ガジャマダ大学大学院にてパフォーマンス&ビジュアルアーツ研究を専攻し修士課程を修了。インドネシア・ドラマティック・リーディング・フェスティバル（IDRF）のディレクターであり、インドネシア・アーツ&シアター・カンファレンスの副ディレクターを務めるほか、Gymnastik Emporium の共同インシエーター兼プロデューサーでもある。2019年には、ジョグジャカルタにおいてアジア劇作家ミーティング（APM）のプロデューサーを務めた。インドネシアの舞台芸術に関わるアーティストたちと、インディペンデントなプロデューサーとしても協働している。



ファシリテーター：山口恵子

京都在住。演劇をつくる人。The Rose Bruford College にて西欧演劇の実技と理論を学ぶ。帰国後、国際共同制作に多数携わる。2011年に演劇グループ BRDG を立ち上げ、日々出会う人々へのインタビューやワークショップを通して作品を創作。2024年、共同制作『Sali-Sari Portal Café』をマニラにて上演。2021～23年 東京芸術祭 Asian Performing Arts Camp ファシリテーター。2023～24年度 セゾン・フェロー。

国際交流基金「次世代共創パートナーシップ－文化のWA2.0－」

独立行政法人国際交流基金は、総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関です。

日本 ASEAN 友好協力 50 周年（2023 年）を契機に、日本と ASEAN の次世代の交流促進と人材育成を目的とする包括的な人的交流事業「次世代共創パートナーシップ－文化の WA2.0－」を、今後 10 年間にわたり集中的に実施していきます。このプロジェクトは、2013 年から約 10 年間にわたって数多くの交流事業をおこなった「文化の WA（和・環・輪）プロジェクト～知り合うアジア～」を発展的に継続するものです。日本語パートナーズ事業と、双方向の知的・文化交流事業を軸に、心と心のふれあいを通じて、多層的な人的ネットワークの強化や、対象地域と日本との将来にわたる強い信頼関係の構築を目指しています。

今後の主なスケジュール（予定）

◎2026年4月～5月：日本・静岡（「SHIZUOKA せかい演劇祭 2026」期間中）

「SHIZUOKA せかい演劇祭 2026」の一環として、東南アジア諸国より招聘する舞台芸術作品を上演。キャンプ参加者は、静岡県舞台芸術公園に滞在し、観劇に加えワークショップへの参加、静岡でのリサーチ、ディスカッションを通して、参加者それぞれが今後3年間で掘り下げるテーマを探っていく。また、演劇祭の観客との交流の場として、公開イベントなども開催。

《招聘プログラム》

◆『マライの虎—ハリマオ』

台本：アルフィアン・サアット、演出：モハマト・ファレド・ジャイナル（シンガポール）
日時：4月25日（土）、26日（日）各日13:00開演 会場：静岡芸術劇場

◆『マジック・メイド』

コンセプト・創作・ドラマツルギー・出演：アイサ・ホクソン（フィリピン）、ヴェヌーリ・ペレラ（スリランカ）
日時：4月25日（土）、26日（日）、29日（水・祝）各日16:00開演 会場：舞台芸術公園 稽古場棟「BOXシアター」

《ワークショップ》

◆アルフィアン・サアット ワークショップ 演劇実践者向け

4月27日（月）10:00～13:00 会場：舞台芸術公園 稽古場棟「稽古場1」

◆アイサ・ホクソン／ヴェヌーリ・ペレラ ワークショップ 演劇実践者向け

4月27日（月）15:00～18:00 会場：舞台芸術公園 稽古場棟「稽古場1」

◆アイサ・ホクソン／ヴェヌーリ・ペレラ『マジック・メイド』ワークショップ：「ほうき学」入門 一般向け

4月29日（水・祝）10:00～12:00 会場：舞台芸術公園 稽古場棟「稽古場1」

《トーク》

『マライの虎—ハリマオ』アーティストトーク

日時：4月26日（日）10:30-11:30 会場：静岡芸術劇場2F カフェ・シンデレラ
〈登壇〉アルフィアン・サアット（劇作家）、モハマト・ファレド・ジャイナル（演出家）モデレーター：滝口健（ドラマツルグ、翻訳者）

《BIOTOPE—劇作家のためのキャンプ 公開イベント》

◆『せかいの劇作家がふるまうランチ会』

5月2日（土）12:00-13:30 会場：舞台芸術公園 せかいの劇場ミニミュージアム「てあとろん」

◎2026年7月～8月：インドネシア・ジョグジャカルタ

ジョグジャカルタで開催される「アジア劇作家ミーティング（Asian Playwrights Meeting: APM）」期間中に滞在し、観劇・リサーチ・ディスカッションを実施。

◎2027年度：フィリピン・マニラ／日本・静岡

マニラの若手劇作家の作品を取り上げる短編作品の演劇祭「ザ・ヴァージン・ラボフェスト（The Virgin Labfest）」期間中に滞在（6月頃）。舞台芸術公園にて、合宿形式でゲスト講師を招き、作品完成に向けてディスカッション・執筆を行う（2028年1月頃）。

◎2028年：成果発表（「SHIZUOKA せかい演劇祭 2028」）

「SHIZUOKA せかい演劇祭 2028」にて、全ての参加者の作品をリーディング形式で発表。

主催：国際交流基金、SPAC-静岡県舞台芸術センター

お問い合わせ：SPAC-静岡県舞台芸術センター

事業担当：前原拓也 maehara@spac.or.jp / 広報担当：計見葵 keimi@spac.or.jp

TEL：054-203-5730（静岡芸術劇場） / 054-208-4008（舞台芸術公園）